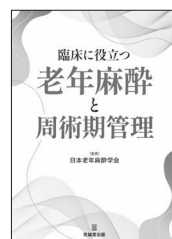




書 評

臨床に役立つ 老年麻酔と周術期管理

監修・日本老年麻酔学会



『臨床に役立つ老年麻酔と周術期管理』は、日本老年麻酔学会の監修による、老年患者の周術期管理に焦点を当てた実践的な教科書である。

わが国では世界に例を見ない速度で高齢化が進んでおり、65 歳以上人口の割合は 2024 年には 29.3%に達し、2038 年には 34.6%に達すると予測されている。麻酔科学および外科領域の進歩により、高齢者に対する手術適応は広がり、手術件数も 2040 年ごろまでは増加すると見込まれている。このような状況の中で、高齢患者の周術期管理は今後ますます重要性を増していく。

高齢患者は加齢に伴う臓器機能の低下や多くの併存疾患を抱えていることが多く、周術期合併症のリスクも高い。特にフレイルを有する患者では、術前からのプレハビリテーションや栄養管理などを含めた包括的な周術期管理が求められる。また術後せん妄や長期臥床に伴う機能低下なども重要な課題であり、術前状態への回復を見据えた丁寧な管理が不可欠である。本書はこうした老年患者特有の問題に焦点を当て、臨床に役立つ知識と実践的な指針を提供することを目的として企画された。

第 1 章では、わが国における高齢者麻酔の現状と将来予測が示されている。低侵襲手術や麻酔技術の進歩により高齢者にも手術医療の機会が広がっている一方で、術後 ADL の回復が十分でない症例も多く、合併症を最小限に抑える高度な周術期管理の重要性が強調されている。また、内視鏡治療やカテーテル治療など鎮静・深鎮静下で行われる低侵襲治療の増加にも触れられ、麻酔科医による安全管理の役割が改めて示されている。

第 2 章では加齢に伴う解剖・生理学的変化を臓器別に整理し、第 3 章では麻酔薬の薬物動態・薬力学の変化について実際の薬剤を例に解説している。続く第 4 章以降では各論として、術前評価、術中管理、併存疾患への対応、覚醒・抜管時の注意点、術後管理、さらには術後合併症までを周術期の流れに沿って解説しており、読者は臨床場面を擬似体験しながら高齢者麻酔管理を体系的に理解することができる構成となっている。

最終章では、“高齢麻酔科医”として函館新都市病院麻酔科にご所属で元病院長の青野允先生の半生がエッセイとして紹介されている。外科医が麻酔も担っていた時代から現在に至るまでの歩み、海外留学や国際医療活動などを通じて培われた経験が語られ、喉頭鏡への深い愛着に象徴される麻酔科医の原点が静かに浮かび上がる、印象的な締めくくりとなっている。

高齢患者の周術期管理は、今後の麻酔科医療における中心的課題の一つである。本書はその理解を深め、臨床現場での実践に直結する知識を提供する好著であり、高齢患者の急性期周術期管理に自信をもって取り組むための良き指針となる一冊である。

(東京大学医学部附属病院麻酔科・痛みセンター
内田寛治)

B5 判, 336 頁
2026 年 3 月, 8,500 円+税
克誠堂出版

